

## 第2章 特性

福岡市のもつ景観特性をまとめる



## 1. 都市形成史の特色

### (1) 海と共に栄えてきた都市

福岡のまちは、古代、大陸との交流基地として誕生したが、それを支えていた博多のみならず、日本三大津\*の一つに数えられ、恵まれた天然の良港であった。

福岡の海岸線は、福岡城の別名にもなった舞鶴城にうかがわれるように鶴が羽根をひろげた形にたとえられる独特の形態をもっている。博多湾の西から、ぐるっと見渡すと、唐泊・今津・荒津・香椎・海の中道・志賀島と、大陸貿易の拠点や万葉集にもうたわれている由緒のある地区を数多くかかえている。

志賀島で出土した「漢委奴国王」の金印や福岡城跡で発見された鴻臚館跡に往時の大陸との交流の様子が偲ばれる。

また、〈商人まち博多〉が形成された当時、内外からの侵略が懸念され、軍事的背景から海岸線には、寺院が建立されており、現在、それらが、近代のまち並みの中に残り、当時の名残をとどめている。

また鎌倉時代には、大陸への玄関口がわざわざして、元の侵略の危機にさらされその防禦の為、博多湾沿いに長大な防塁（元寇防塁）が築かれたこともあった。

このように、幾度となく歴史的な舞台となってきた海岸線も土砂の堆積や埋め立てにより徐々に姿をかえ、近代的な港湾も整備されていった。時代の推移とともに一般市民にとって日常的には海との結びつきを感じることは少なくなってきたが、古代、中世と福岡の発展の礎となってきた海、みなとがまちに隣接しているという事実は、今も博多湾に厳然と存在し、海によって開かれ、海に向かって栄えてきた福岡という固有のイメージを人々に与えている。



\*日本三大津  
坊津、博多津、安濃津

### (2) 二都市の融合

福岡市が福博のまちと呼ばれるように、福岡市は、福岡部と博多部\*が融合して成立し、それらは今も市の中心となっている。

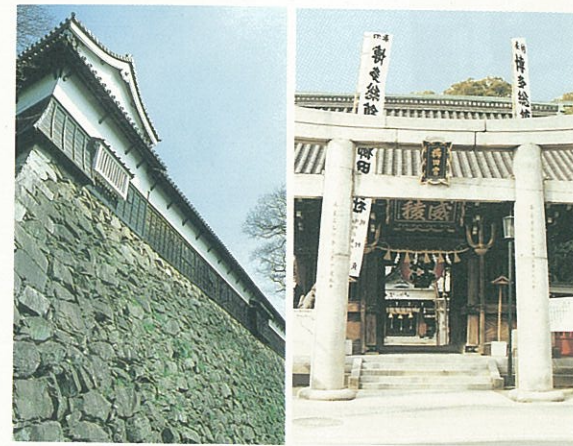
黒田長政による福岡城の築城までは、博多部が中心であり、城下町の形成により福岡部ができあがった。江戸時代には、二つの都市はそれぞれ独立したまちであり、一般市民の交流も薄く商人まち、武士まちとして違った地域社会を形成していた。

明治以後、この二つの都市の一体化がなされたが、長い時間をかけて異なった市民社会で培われた風土、文化は当然大きなまちの環境の相違となってあらわれていた。

近世以後、商人まち博多のもつ商業基盤を背景にして博多部が新生福岡市\*となっても中心地区として栄えてきたが、戦後、福岡部（天神地区）へその中心が移行した。これに伴い、博多部の地位は低下したが、ここに育った伝統、文化は、古くから確立された地域社会（自治組織）を軸にして、祭や伝統工芸等によって市民に感じとられ福岡市のまちに深みと風格を与えている。

このように、福岡市は、人口100万を超える単なる地方中枢都市ではなく、歴史と伝統のある文化と個性をもった都市であるという独自性をもっている。

人々は、福岡というまちの名だけでは語りつくせないものを博多という言葉、ひびきに感じており、この福岡部、博多部の複合都市ならではの個性を今後も尊重し、活かしながらまちづくりを進めていく必要がある。



\*福岡部と博多部  
市の中心を北へ流れる那珂川をはさんで、西側の城下まちを福岡部、東側の商人まちを博多部という。

\*  
1587 太閤のまち割り  
1602 黒田長政、福岡城に  
1889 櫛形門の廃止  
福岡市制

### (3) 自然と調和した都市

福岡のまちは、弥生時代からいち早く農耕文化が栄えた沖積平野にひらけており、起伏の少ない地形の中で背景としての山並み、まち中の緑地が、都市形成の過程を通じてうまく活用され景観上のアクセントとなっている。

福岡の地形の特徴である海岸線は、糸島から志賀島まで連続して、福岡の輪郭をつくっている。このうち中心市街地に近い海岸線は近代的な港湾へと変貌したが、郊外には江戸時代植林された松林等の緑も豊かで、雄大な砂州をもつ海の中道などが海岸線の美しさを十分に楽しませてくれる。

また、市街地や近郊の自然緑地は、宅地開発等により失われたものも多いが、歴史をもつ大濠公園、舞鶴公園のオープンスペースをはじめ、明治初期に福岡で最初の太政官公園となった東公園、桜で有名な西公園が東西の核的な緑地ゾーンとして確保されており、比較的バランスよくかなりまとまった緑が都市部に残されている。

唯一の市街地の緑地帯として続く小笹・南公園・赤坂一帯では、まちの中に緑が組み入れられ、質の高い住宅地など自然の地形を活かした土地利用が行われている。

福岡市でも最近とみに再生が叫ばれている河川空間については、地域のシンボル河川である室見川・多々良川・那珂川を中心にいち早く水辺環境整備への取り組みがなされ、各地区で水辺の活用が図られている。

特に福岡市の場合、大規模な重化学工業が立地しなかったため、生活排水などにより若干の水質の低下はあったものの、比較的良好な水辺環境が保たれており、都市内でも河川空間が貴重なレクリエーションゾーンともなっている。

このように、身近なところに自然の緑・水のスペースが豊富に存在し、そうした場所に気軽に訪れることの出来ることが都市イメージの向上に役立っていると同時に、多くの市民が認める福岡の住みやすさの一つの大きな要因となっている。

## 2. 骨格的資源

自然系・歴史系・都市系という分類による、市域の様々な景観資源の中から視覚的、心象的に福岡の景観を特徴づけたり、地区のまとめり、区切りなどの手がかりとなる特に重要なものを骨格的資源として示す。

### (1) 自然系

都市景観を考える上で自然や地形は、それ自体の形態や機能が重要であるだけでなく、都市のあり方を少なからず方向づけるという作用も見逃せない。自然系の骨格的資源として面的な広がりによって視覚的効果の強い緑地と、開放的なオープンスペースを連続的に生み出している水辺（河川・海岸線）とがある。

そのうち緑地については、市街地の背景や境界となっている郊外の緑と、市街地内でゆとりやうらおいを提供し、市民にも身近に感じられているまち中の緑とに区分される。

### ア. 緑地

#### (ア) 郊外の緑

油山、飯盛山、叶岳、立花山、三日月山、志賀島、能古島

平坦な地形のひろがる福岡の市域の緑の背景となる緑地帯であり、西部に位置する油山、飯盛山、叶岳、東部に位置する立花山、三日月山の山並みが代表的である。さらに、緑のポイントとして、遠景となって望まれているものに志賀島・能古島の島内樹林地がある。

#### (イ) まち中の緑

大濠公園、舞鶴公園、西公園、東公園、南公園、海の中道海浜公園、生の松原、奈多の松原、松崎緑地、東平尾公園

自然の緑が少ない市街地において、市民に最も親しまれているシンボリックなオープンスペースが大濠公園・舞鶴公園ゾーンである。本緑地ゾーンは水と緑が豊富にある大濠公園と市民のレクリエーション、運動の場や桜の名所となっている舞鶴公園からなり、市民生活に質の高い、うらおいある空間を提供し、福岡市のセントラルパークといえる環境をもっている。

その他にも、市内には公園や緑地が各地区に配置されており、西公園、東公園さらに動植物園を含む南公園が代表的な緑のオープンスペースとなって市民の利用が多い。

また海の中道海浜公園は、今後北部九州の一大レクリエーション基地をめざして個性的な海岸線を活かしながら、レクリエーション施設と緑地帯を一体として整備されつつある。

今は少なくなったが、海辺の防風林として植栽された松林も白砂青松をつくりだす貴重な緑として残っている。松崎緑地は数少ない斜面緑地であり、多々良川と一体となって特徴のある緑地景観となっている。

## イ. 水辺 (ア) 河川

### 室見川、多々良川、那珂川

福岡市には、西や東へ広がった地形のそれぞれ西、東、中央地区に代表的河川が流れている。

中央の都心地区には、その昔、福岡と博多を区分していた那珂川があり、最も市民になじみの深い河川といえる。

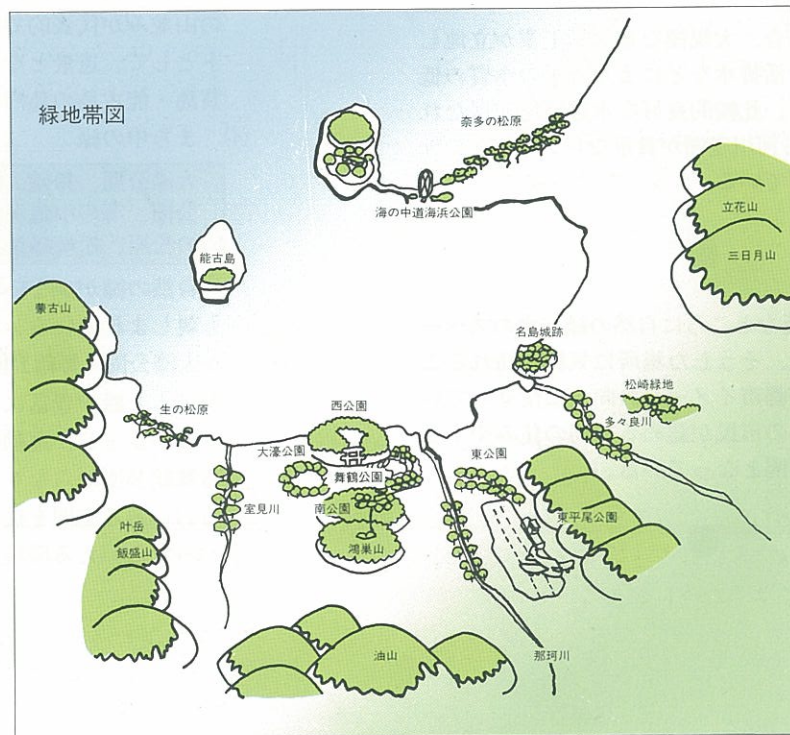
西の室見川、東の多々良川は各々西や東の郊外から福岡市の都心に向かうシティーゲートとしての役割をもち、河畔公園、緑道の整備により、水辺空間の利用も図られ、独特の水辺景観を整えつつある。

## (イ) 海岸線

### 生の松原～糸島半島、志賀島～海の中道

海を介した大陸交流の玄関口を都市の起源とする福岡のまちに、海岸線は欠かすことのできない要素である。

生の松原から糸島半島、志賀島から海の中道にかけては、自然海岸が残り、様々な海辺レジャー、レクリエーションによって市民が海を肌で感じることのできる貴重な海岸線となっている。



## (2) 歴史系

都市の景観は、長い歴史とともに人々の暮らしの中でひとつずつ積み重ねられてきたもので、どのまちかど、どのまち並みをとっても歴史性をもたない要素、対象は考えられない。しかし、それぞれの要素、対象がもつ歴史的価値（学術、教育、文化、観光など）に濃淡があり、あるものは文化財や史跡として保護され、あるものは時代の流れの中で忘れ去られようとしている。

その中で、歴史系の骨格的資源には、地域を形成する上で重要な役割を演じてきた歴史的拠点や、伝統的な建物やまち並みが残り、歴史的な風情をもつ歴史的環境地区があげられる。

### ア. 歴史的拠点

#### 香椎宮、榊田神社、管崎宮

福岡市には、神社を中心に形成されたまちも多く、そのような神社は地域と一体となって受け継がれてきた重要な歴史を現在に伝えている。このような神社は福岡のまちの歴史の中で最も古くから記録にあらわれ、その場所、建物が歴史を語る事実として残るもので、香椎宮、榊田神社、管崎宮がその代表的なものである。

香椎宮は、神功皇后ゆかりの地であり、周辺には数限りない伝説、神話が残り、多くのロマンを秘めている。榊田神社は、平安時代末にこの地に創建されたといわれており、以来博多の総鎮守としてあがめられ、700年以上の歴史をもつ博多祇園山笠の拠点として知られる。

管崎宮は、日本三大八幡として栄え、神社を中心に古くから門前町を形成し、地域の核となっていた。

### イ. 歴史的環境地区

#### 御供所町

福岡市には、近世以前の建物は数少なく、明治・大正期の近代建築も若干残ってはいるものの、それらの建物の集合によって特色ある地域が形成されているところはほとんど見当たらない。

しかし、御供所町周辺には聖福寺をはじめとして、多くの寺院があり、また、博多の古いまちの風情がその路地、まち並みに残っている。

## (3) 都市系

都市系の資源は、都市の建設の中で生まれてきた道路や建物など人工的なものの集合であり、開発や建設によってその姿を変えていく。そうした都市活動の積み重ねで生まれた都市系の骨格的資源は、大きく、幹線道路や鉄道の沿線である都市の軸と、ある一定の範囲に特徴的な機能が集積した都市の拠点さらに海に臨む流通拠点となっている港湾に分類することができる。

### ア. 都市の軸

#### (ア) 東西軸

この軸線は市東部、香椎地区から、天神、西新、今津を経て唐津へ至る海岸線沿いの旧唐津街道にあたるもので、この沿道に宿場町、門前町の名残をかすかにとどめながら市街地が形成されて現在に至っている。

明治以降、近代における福岡市の市街地の発展は、国道3号線と国道202号線及び同バイパス（今宿新道）でつくり出される東西軸を中心に組み立てられており、地下鉄が開通した現在、その重要性は増していく傾向にある。

#### (イ) 南北軸

この南北軸は古代、那の津と呼ばれていた博多の港より、遣唐使が旅立っていたころから、西の都「大宰府」と博多を結ぶ重要なルートとして開かれていた。

近年における著しい市南部地域への都市化は、西鉄大牟田線沿線と国道3号線で構成される南北軸を中心に進んでおり、この軸はさらに筑後、熊本へと南へ伸びるルートでもある。

### イ. 都市の拠点

#### 天神、博多駅、博多部、渡辺通、西新・藤崎、香椎、大橋

主要な商業施設、公共施設、業務・サービス施設が集中する都市の顔となる部分であるとともに交通の結節機能をもち、都市の中核管理機能を有する重要な地区であり都心部、副都心に分類される。都心部は、大きく、天神、博多駅、博多部、渡辺通の四つの地区にわけられる。また副都心は西新・藤崎、香椎、大橋で構成される。

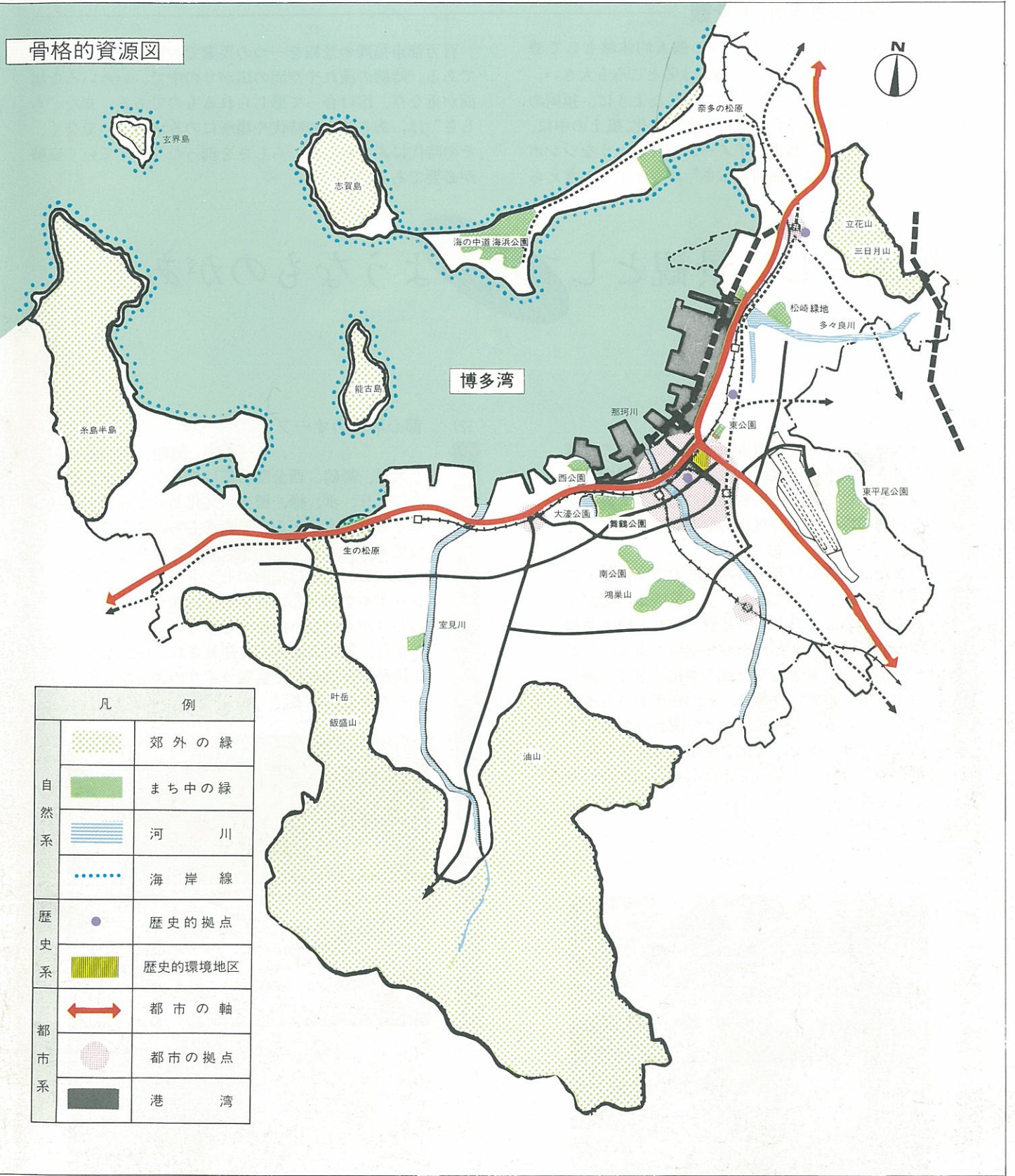
### ウ. 港湾

#### 臨港地区

市民に身近な空間とはなっていないが、生活関連物資を安定供給する生活港湾として、また、諸外国との間に多くの定期貨物航路を有する国際港湾として整備されつつあり、市街地と海とを結びつける福岡の特色ある景観となりうる。



骨格的資源図



### 3. 福岡らしさを示す景観

福岡らしさは、市民や訪れる人の個人的体験として感じとられるものであり、各人の主観によるところも大きい。しかし、先の景観上の骨格的資源で示したように、福岡の固有の自然と歴史の中で育まれてきた文化、風土の中に、大多数の人々にとって都市をイメージづけるようなシンボル空間があり、そこに“福岡らしさ”が存在すると考えられる。

百万都市福岡の景観を一つの要素で表現することは困難である。時間の流れや空間の広がりの中で、いろいろな場面が重なり、溶け合って感じられるものである。また“らしさ”は、ある特定の時代や場所にもみ求めるのではなく、その時代にふさわしい、らしさを創ったり育てていく姿勢が必要である。

## 福岡らしい景観として次のようなものがある。

#### (1) 海（みなと）

海を抱くような福岡市の地形は鶴がその両翼を大きくひろげた姿にも似て優美な海岸線を形づくるとともに、波高き外海の玄海灘と波静かな内湾の博多湾との対比的な美しさを感じさせる。

また、内湾に位置するみなとの空間は歴史の源、文化のよりどころとして、福岡市の起源である博多のまちの発展の基盤となり、絶えず福岡のまちと深い関わりをもつ空間である。しかし、都市の産業構造や交通の変化の中で、海に対する市民の思いは薄れ、その存在からも疎遠になっている。今一度、海との関わりを通じて培われてきた歴史、文化を確認するとともに、市街地では少なくなってきた水とのふれ合いの場を福岡のまちのシンボルとして創出していく努力が必要となっている。

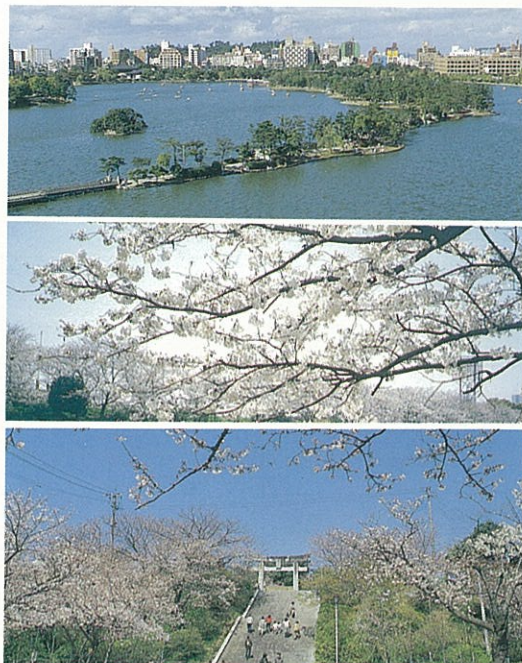


#### (2) 都心周辺のオープンスペース

[大濠、舞鶴、西公園]

大濠、舞鶴、西公園一帯は都心からの歩行圏内にあり、水、緑、歴史、文化という都市生活にうおいを与える諸要素をもち、ここでは、自然の変化とともに四季の移り変わりを感じとれる。この地域は福岡のセントラルパーク的なシンボル空間として長年市民に親しまれ、市民のかけがえのない財産となっている。

また、舞鶴公園内から発見された鴻臚館跡は今後歴史を活かした景観づくりの大きな要素となると考えられる。



#### (3) 都心

福岡市の顔となる景観は、活発な都市活動が展開され、活気と賑わいをもった都心にみいだされる。

都心には交通、経済、文化など都心機能の集積によりもたらされる豊富な情報、密度の高い交流が、高度な情報発信拠点として多くの人々をひきつける。このことが多彩な表情をもつ都心景観を創り、それが新しい文化、ファッションを次々に生み出して、福岡の都心的魅力を増幅している。



#### (4) 精神的風土

JR九州の駅名にみられるように、博多の名が時には福岡以上に親しまれている背景には、大陸貿易の時代から脈々と受継がれてきた博多町人文化に彩られた生活感あふれる福岡のまちの歴史や伝統がある。

かつて勢力をもった自治都市博多を偲ばせるエネルギーは、博多の祭「博多祇園山笠」、「博多どんたく」以外に感じられる機会は少なくなっているが、博多の名のもつ響きは独特の暖かき、親しみを感じさせてくれる。

しかし、大多数の市民が他から移り住んできたという現状は、都市の歴史、伝統に対する人々の関心、意識を減退させ、それとともに博多の名残を示す場所も徐々に失われてきている。大都市福岡の一部として博多がもつ風情、文化、人情という精神的風土を生活や心の中に残し具体的な都市景観の形成に活かしていくことが必要である。

